

百足獅子舞

獅子舞は日本全国でみられる、獅子の衣装とお面を付けて踊るという一般的な伝統芸能です。振り付け、衣装、参加する人数などは、地域によって大きく異なります。白川郷では、獅子舞は常に4人が一緒になって踊ることになっており、足が8本あることから「百足獅子舞」という名前が付けられています。この百足獅子舞では、獅子は獅子を退治する2人の勇敢な戦士の「ししとり」と戦います。このししとりは伝統的に子供たちが演じることになっており、また百足獅子舞のパフォーマンスは主に2つの場面で構成されています：最初の場面では、獅子は災難の象徴と考えられている蛇と戦い、そして蛇を食べます。次の場面ではししとりが獅子と戦います。獅子はここでは災害やさまざまな病気などの象徴なのです。そしてししとりは獅子を倒しますが、獅子はクライマックスで立ち上がり、自分を倒したししとりたちと一緒に踊るのです。最後の場面は、自然は飼いならすことができないので、人間は自然と調和して生きる方法を学ばなければならないことを気づかせてくれます。少なくとも18世紀後半から白川郷で行われている、この百足獅子舞は白川郷特有のものです。庄川沿いの他の場所で行われる似たようなの踊りの影響も取り入れています。獅子舞の踊りの部分は、白川郷上流に位置する飛騨地域で一般的な獅子舞と似ていますが、獅子と戦うししとりが加わることは、現在は富山県と石川県となっている下流の地域で行われている伝統の影響を受けたとも考えられています。また百足獅子舞自体も、村ごとに少し異なります。現在、独自の百足獅子舞を行う村の協会は、全部で7つあります。毎年開催されているどぶろく祭りの一環として、白川郷で百足獅子舞が踊られる10月には、演者たちの素晴らしい才能は高い評価を受けることになります。